瞳子の日常

七崎 雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
瞳子の日常

【Ｎコード】
Ｎ０２７６Ｙ

【作者名】
七崎　雨

【あらすじ】
私のうちには、変な絵がある。といっても変なのは見た目じゃなくて……『とーこー！オレを鑑賞しろー！』――うちの絵画、しゃべるんです……。ナルシストおバカな絵画と、女子高生瞳子の短編連作。※拍手に最新話がのっています。

宿題（前書き）

※ノリだけでできています！

宿題

私の家には、変な絵がある。
『おい瞳子、ちょっと小一時間オレ様の観賞をしろ！　そして褒め称えろ！』
壁に掛けられた綺麗な絵が、いつものようにそうわめいた。――言っておくけど、私の頭がおかしくなったわけじゃない。
「い・や！　あたし宿題するんだもん！　3秒で我慢して！」
『なんでだよ！？　見ろこの美しい情景、鮮やかな色合いを！　すばらしいコバルトブルーじゃないか！　ああ、さすがオレ！』
たしかにフランス帰りのこの絵画は、輝きながら息をしているような青い海と、まあるい月の浮かんだ夜空がとても幻想的だ。私は絵についてはよくわからないけれど、初めてこの絵を見た時にはその青の美しさに思わず息をのんだ。――いきなり話し始めた時には、思いっきり叫び声を上げたけれど……。
こんなに神秘的な絵なのに、どうしたらそんな性格になったんだろうか。人は見た目によらないって言うけど、それって絵にもあてはまるのかな？
『嫌だー！　瞳子、オレを見ろ！　オレだけを見てくれぇぇ！』
「あーもう、昨日ちゃんと見たでしょ！　わがまま！」
今日も今日とて、絵画は粘着彼氏みたいな発言をしてくる。彼は何しろ人に見られるのが大好きで、常に誰かに見つめられ、褒められていたいというどことなく病んだやつなのだ。多分彼は全人類が一生自分のことだけ見て生きていけばいいと思っている。ならいっそ美術館にでも行けと思うけど、お母さんが一目惚れして買ったかなり高価な絵らしいし、帰ってきたお母さんに『ああ、今日も素敵な青色！　最高だわ！』と褒め称えられるのを彼も楽しみにしているようなので、取りあえずそのままにしている。
『オレの青の美しさは、シャガールをも超えるぞ！　お前は恵まれ

た環境にいるんだ！　もっとオレを褒めろ！』
「絵画、怒られるよ……」
シャガールの青を見たことはないけれど（見てみたいなー、とか言ったらうちの絵画はどんな顔するんだろ）、そんな簡単に芸術を貶してはいけないとおもいまーす。
「さて、宿題でもやるとしますかねー」
『いやだ、瞳子、とうこぉぉぉ！』
絵画の叫び声。これに絆されてはいけない。前に、あんまり悲しい声を出すので戻ってやったら3時間ほど観賞させられたことがあった。
『とーこー！　とうこー！』
……。ほだされては、いけない。
「――はやく、宿題おわらせちゃおう……」
子供のように私を呼ぶ声を背に、私は自分の部屋のドアを開いたのだった。

ホットケーキ

「うん、我ながらおいしい」
私は自分で作ったホットケーキをぱくりと頬張った。
ホットケーキごときで作るとか言っちゃいけないかもしれないけど、私の主食はホットケーキだ。ホットケーキさえあれば生きていける。科学の限界も超えてやるぞ！
『なー瞳子、それうまいのか？』
「うん、世界で1番おいしいよ」
『オレが見たことある料理の中では3番目くらいにまずそうだぞ』
「わかってないねー。ホットケーキは全ての食材にマッチするの。はちみつとかお好みソースはもちろん、ハム、チーズ、肉じゃが、納豆に漬けものだって最高の味にしてくれるんだよ？」
『そうだったのか！　知らなかった、いつか食べてみたいものリストに追加しておこう』
「え？　絵画ごはん食べたいの？」
私はもごもごマグロのお刺身を頬張って聞くと、絵画は『まーな』とそっけなく答えた。
絵画はもちろん絵画なので、食べたり飲んだりはできない。どこまで感覚があるのかはちょっとわからないけど、とりあえず視覚と嗅覚はあるみたいだ。
「そっか」
……なんだかちょっと絵画が可哀そうに思えてきた。絵画がごはん食べるなんておかしいことだけど、そりゃあ目の前で毎日こんなおいしそうなもの食べられたらそう思っちゃうよね……。
「絵画……」
私が視線をやると、絵画は我慢しきれないというように息を吸って……
『だあぁぁ！　そんなことはいいから、さっさとオレを観賞してく

れ！　瞳子はなんでオレ様みたいな素晴らしい絵の横でそんなくだらない行為をしてられるんだ！？　もっとオレを褒めろ！食い物なんていつでも食えるだろ！』

――え？　くだらないこういう？

『この瞬間のオレは、今しか見れないんだぞ！　一瞬一瞬オレは変化していくんだ！　四六時中見ていろ！　そして褒めろ！』

それが世界の真理だ！　とばかりに言い放った絵画。

――同情して損した。……人の思いを、ホットケーキを、一体なんだと思っているんだ！

私は席を立って、それから……

「……よいしょ」

『おい瞳子、何を、うわ、やめろー！　ううぇあ！』

絵画を壁から外すと、床に置いた。うつ伏せ（？）に。

『つめたい、つめたいぞ瞳子ー！』

「あ、温度感覚あったんだ」

私は再びソファに戻って、ホットケーキをぱくっと口に入れる。

うん、おいひい。

『とーこー、暗い、見えないー！　とーこぉぉ！』

「……食べ終わるまでがまんしなさい」

ホットケーキを侮辱するものは許さないぞ！　子供みたいにみーみー言い始めた絵画を無視して、私は食事を続けるのだった。

ホットケーキ（後書き）

読んでくださってありがとうございます！
こんなかんじでだらだらしたり、ときどき新しい子たちもでるかもしれません。
あとこのページ、目がちかちかしないでしょうか……？
もし見にくいとかあれば（もちろんなにもなくても）、コメントいただけると嬉しいです。
拍手に新しいお話をあげたので、よろしければそちらも……（さくしゃがこっちをみているぞ！）

ねこ

『なあ瞳子ー、こいつらは何故こんなにドロドロドロドロしているんだ？』

夜、今流行っている恋愛ドラマを観ていると、絵画が不思議そうな声で言った。

「恋愛ってこういうものだからだよ。女の嫉妬は怖いって言うでしょ？」

私はそう言ってじっと画面に見入る。しかしヒロインが、自分の恋人と親友のらぶらぶシーンを目撃したところで、エンドロールに入ってしまった。続きはまた来週。

「あー、ほんっとに焦らすよねー。こっちの方がやきもきしちゃうよ」

私はそう言って、机の上の蜜柑を食べる。この前青りんごを絵画の前で食べようとしたら、『オレはそんな色を青とは認めない！』と大騒ぎしてうるさかった。緑でも青信号だし、昔は緑も青って言ってたんだよ、と言っても絵画は『意味がわからん！　青は青だ！』とまったく聞きいれる様子がなかった。本当に面倒な絵画である。

私はＣＭを眺めながら、ぱくりと蜜柑を口に入れる。

オレンジ色の蜜柑はよく熟れていておいしい。ちなみにすじは面倒にならない程度には取るけれど、別に付いていても気にはしない。付いてた方が栄養あるって聞いたけど、本当かな。

『ほー……そういうものか。オレには理解できないな』

「まあ私もさっぱりしてる方が好きだよ。昼ドラとか大変なことになってるときあるしね。あ、でも『この泥棒猫ー！』っていうのは１回くらい言ってみたいかも」

でもやっぱりそんな展開になったらめんどくさいかなー。うーん、やっぱりいいや。お前はもう死んでいる！とかは現実にあったらホラーだし……月に代わってお仕置きよ！とかがいいかな？そういえ

ば今の美少女ものって素手で戦ったりすることあるよね。パンチとかキックとか。やっぱり手ぶらの相手に道具はダメってことなのかな？　ただでさえ敵１人対大勢とかあるし……まあどうでもいっか。

『瞳子、まさか……あのぐにゃっとして毛の生えただけの、にゃーにゃーうるさい奴らが好きなのか……？』

なんかゴから始まってリで終わる、黒光りするアレみたいな言い方するな……。

「そう言う意味のセリフじゃないんだけど……まあ好きだよ、猫。可愛いし」

私が言うと、絵画はくわっと顔色を変え（たぶん人間だったら、という比喩表現だけど）て、『そんなバカげた話があるか！』と大声を出した。

「あいつらがかわいいだと！？　とんでもない、あんな下劣な下等生物ども！」

「……ねこちゃんバカにするんじゃありません！――で、一体何されたの？」

絵画は基本的に自分のことしか興味がないので、特別何かを好きになったり嫌いになったりすることが少ないと思う。この取り乱しようは、きっと何かあったに違いない。

絵画はうおぉぉ、と唸ってから、心底思い出したくないとでも言うように重々しく言った。

『あいつらは……オレのこの高貴なる身体に……ま、マーキングを……！』

あ、なんかわかった。

「……絵画、ちょっとお風呂場に……」

『未遂だ！　かなり昔のことだしな、しかしあいつらときたら、ぐぬぬぬ……』

相当なトラウマになっているらしい。気持ちは分からなくもないけど……いやでも、私はやっぱりねこちゃんが好きだ！

「――きっとほら、猫もさ、絵画が綺麗だからマーキングしたくな

っちゃったんじゃないかな……？」
苦笑いの末に私は優しさを込めて、絵画にそう言った。絵画は少しの沈黙の後、
『お、おお、なるほどな！　あいつらもなかなかわかっているじゃないか！　よし、もうこわくない、こわくないぞー！』
絵画はそう言ってまた、『とーこ、オレのどこら辺がどうきれいか具体的にいってみろ！』とかふんぞり返ったけれど、次の瞬間テレビに映った猫を見て、『ぎゃ！』と声を上げていた。
「……絵画、絵画はねー、まずこの海がすっごくいいと思うの。神秘的なのに、それでいてお母さんみたいにあったかいかんじがするよね。あと私はこの黄色い、とろけそうな、ホットケーキのバターみたいな月も綺麗だと思うなあ」
『お、おお、わかるか瞳子ー！　さすがオレの所有者の娘だ！』
もっと褒めろとふんぞり返る絵画に、私は空が綺麗とか、やっぱり青色がいいとか、いつもの倍くらい丁寧に絵画を褒める。
『ふふん、さすがオレ、あのぐにゃぐにゃどもにもこの美しさを悟らせてしまったんだな！』
満足そうに笑う絵画を見て、私は引き攣った笑いを浮かべた。
――明日知人のねこちゃんあずかるの、絵画にはまだ黙っておこうかな……。

ねこ（後書き）

拍手お礼なのにローテーション早いよ！と思いながらも、なぜか書きたくなってしまったので更新です。このように今後も気まぐれに更新したり停滞したりすると思われます。
拍手も更新しました！よろしければそちらもどうぞ。そして感想や突っ込みなどをいただけるととてもうれしいです。
読んでくださってありがとうございました！

いとこ1

「夏目ちゃん、いらっしゃーい！　さ、入って入って！」
「久しぶり、瞳子。元気そうね」
今日はいとこの夏目ちゃんが遊びに来てくれた。夏目ちゃんは私と同い年の女の子だ。今は遠くの学校に通っているからあんまり会えないけど、小さい頃はよく一緒に遊んだりしていた。
「おじゃまします。はい、これお土産」
「わー、ありがとう！……おばさん今度はカナダに行ったの？」
手渡されたのは、瓶入りの高級そうなメープルシロップ。前来た時にはたしか、フランスのマカロンだった気がするけど。
「ちょっと前まで。今はイギリスにいるって言ってたわ」
夏目ちゃんのお母さん、つまり私のお母さんのお姉さんは、いつも世界中を飛び回って仕事をしている。
「そっかー、おばさんも忙しそうだね」
「まあ、本人が楽しそうだから良いんじゃない？でも瞳子のところも大して変わらないでしょ」
「あはは、でもうちは夏目ちゃんとこほどではないよ」
私のお母さんも、夏目ちゃんのお母さんほどではないにしろ、絵画を買えちゃうくらいにはバリバリの仕事人間だ。夏目ちゃんも将来は出来る女になりそうだし、やっぱり血なのかな。……え、私？
――えへへ……。
「うれしいなー、こんなに高級そうなメープルシロップはじめて！」
「――あんた、まさかまだあのおかしな食生活続けてるわけ……？」
夏目ちゃんが眉を寄せて言う。
「失礼な、ホットケーキは最高の食べ物だよ！？　それにちゃんと、おかずとして野菜も魚も食べてるから大丈夫！」
「――いや、それがおかしいと思うんだけど……まああんたがいいならいいわ」

夏目ちゃんは、一応栄養は摂ってるのよね……？と苦笑いを浮かべたけれど、その後は何も言わなかった。――よし、今日は夏目ちゃんにホットケーキの巣晴らしさを教えてあげよう。その瞬間私の中で、今日の献立が決まる。今日の夜ごはんは、豪華に手巻きホットケーキだ。あとでお刺身買わなきゃなー。

『夏目、よく来たな。お前も早くオレを見たくてたまらなかっただろう』

リビングに入ると絵画がふんぞり返ってそう言った。絵画の中では、世界中の人が絵画に日々焦がれていることになっているらしい。ほんと、こまった絵画だなぁ。

「あんたはほんと変わんないわねー」

『当たり前だろう、オレはもう完成品だ！　これ以上美しくなることなんて不可能なんだぞ！』

私の記憶ではこの前、オレは一瞬ごとに変わるって言ってたように思えるんですが……。

「あー、はいはい」

夏目ちゃんは呆れたように、絵画を見て笑った。

夏目ちゃんは、絵画が話せることを知っている。

普通の人は絵画がいきなりしゃべりだしたらびっくりすると思うんだけど、夏目ちゃんは『あら、あなたしゃべれるの？』なんてなんでもなく受け入れていた。ちょっと聞いた話によるとどうやら夏目ちゃんは変わった体質らしくて、こういう変なものには慣れているらしい。――慣れるほど、変わったものがいるの……？　見てみたいような、見たくないような……。

さあオレを観賞しろ、と威張る絵画に近寄って、私はぴっと指を立てる。

「絵画、夏目ちゃん疲れてるんだから後にしてね。夏目ちゃん座ってて、私お茶淹れるね。ホットケーキはメープルシロップ？　それ

ともチョコシロップ？」
「いや、そんなおかまいなく……」
夏目ちゃんったらなに今更遠慮してるの？　全然気にすることないのに。
『疲れている時こそオレを観賞しろよ！　どうだ、癒されるだろう夏目！』
「もう、疲れたらホットケーキに決まってるでしょ？　夏目ちゃんはホットケーキを食べるの！」
むむむ、と絵画と睨みあう私。
「――あんたたち、実は結構似たもの同士よね……」
なにか夏目ちゃんの声がしたけど、その声は私と絵画の言いあう声にかき消されて、残念ながら私の耳までは届かなかったのでした。

いとこ2

「夏目ちゃん、学校はどう？　最近はなんか危ない目に会ったりしてない？」
　別に気にしなくていいのに、夏目ちゃんは丁重に私の申し出をお断りして、お煎餅をかじった。私は向かいでホットケーキにたっぷりメールシロップをかけて、黄色いバターをのせて食べている。さすが本場のメープルシロップはおいしくて、思わずどんどん食べてしまう。なんだか私だけ申し訳ないなぁ。
　夏目ちゃんはその体質柄、日常的におかしな事態に遭遇している。霊感とかは特にないらしいから心霊現象に会うことは少ないみたいだけど、そのほかのいろいろ……とにかくいろいろに出会う天才みたいな人なのだ。
　夏目ちゃんはお茶を一口飲んでから、そう言えば、と口を開いた。
「この前悪魔とゲームしてきた」
「……なにそれ」
　予想外の答えに思わず返事が遅れてしまう。
　どうして日常会話に悪魔が出てくるの、とか聞いてはいけない。何故ならこれが夏目ちゃんクオリティーだから。これが紛れもなく夏目ちゃんの日常だから。そしてそのゲームって言うのはおそらく、テレビにつないでぴこぴこできたりるあのゲームでは、ないよね……？
「いやー、もうちょっとで魂取られるとこだったわよ。子供みたいな姿のくせにえげつなくってもう……」
　私がなんて答えていいのかと迷っていると、夏目ちゃんは、
「あ、でも勝ったよ？」
と付け足した。
　――そういう問題じゃないよ、夏目ちゃん……。

夏目ちゃんはしっかりものなんだけど、なんか常識がずれているというか、ずれざるを得なかったと言うべきか……ほんと、よく今まで無事に生きてこられたよなぁ……。
そう思えば、この肝の座った性格もなるべくして、ということなのかな。
私が聞いた限りでも、どう考えても一般人には起こり得ない出来事が、夏目ちゃんには6月に雨が降るのと同じくらいの確率で起きている。つまり私の夕飯がホットケーキなのと同じくらいの確率。
――我がイトコながら、恐ろしい人だなぁ……。
それでも周りに頼りになるお友達がいるらしいから、ちょっとは安心だけど。
「なんか、本当に夏目ちゃんって不思議な生活してるよねー」
私がもう笑うしかないので笑いながら言うと、夏目ちゃんは少し黙ってから、
「いや、あんたもなかなかよ？」
そう言って絵画の方を見て、お互い困ったわね、と唇を上げた。
『おいとうこー！　茶を飲んだのなら夏目にオレを観賞させてやれよー！　ついでにお前も褒めろー』
「……」
――絵画が後ろで喚いている。
言われてみれば……言われなくてもわかるけど、たしかにこの絵画も私が息をするのと同じくらいの確率で、いつも同じことを喚いているなぁ……。
「――やっぱり、血は争えないってことなのかしらね」
夏目ちゃんが絵画を見て、私の考えていたのとおんなじようなことを言う。
『とーこー！　とーこおぉぉぉぉ！』
絵画の声が、リビングに響き渡る。――うるさい。
夏目ちゃんはあんまり情けない絵画の声に、ぷっと吹き出した。
「すみません、うちの絵画が……」

なんか恥ずかしい、恥ずかしいんですけど絵画くん。やめてよもうお客さん来てるのにぃぃ！

私は止まない声に一つ溜息をついて、それから、

「――ほんとに、私たちなんでこんなことになってるんだろうね」

と顔を見合わせて、夏目ちゃんと2人、あはは、と苦い笑いをこぼした。

いとこ2（後書き）

いとこの夏目ちゃんです。
本当は夏目の話の方が先にあったんですが、長すぎてなかなか書けません。ちなみに夏目の日常はそれなりにほのぼの、でも割と命の危機にさらされたりしています。
読んでくださってありがとうございました！

雪

「雪だぁぁぁ！」
朝目覚めてカーテンを開けると、外は一面銀世界。冬が来た、冬が来たぞー！
「絵画、かいがー、見て見てほら！　まっしろ！　まっしろだよー！」
『そんなにおもしろいか……？』
パジャマのままはしゃぎまわる私に、絵画は冷めた目を向けてくる。まったくもう、大人ぶっちゃってー。
「わー冷たい！　冷たいよー！」
大急ぎでカーディガンを羽織って、リビングの大窓を開けて雪に触れてみる。ふわふわした雪はじんわり私の熱を奪って、呆気なく消えていってしまう。こんなに軽くて儚げなものが、町一面をおんなじ色に染め上げたんだなー……ほんっと、雪すごいよ！　すごいよ雪！
「あー、かまくらつくりたいなー。もっといっぱい降ってくれればなー」
このあたりはそこまで雪が深くないので、雪うさぎが限界ラインだ。雪国の人たちは雪かきがつらいって嘆くらしいけど、１度でいいから私も雪だるまとか雪合戦とかしてみたいなぁ……。
『とーこ、寒いぞ！　さむいー！』
「あ、ごめんごめん、はいこれ、マフラー貸してあげるね」
絵画にぐるぐるマフラーを巻いてあげる。――なんか微妙な空気を醸し出してる気がするけど、そんなこと今の私には問題ではない。
「雪だあぁぁぁぁぁ！」
きらめく銀色、やわらかな白。ああ、これでこそ冬！
「わー、今日のごはんはあったかいのにしよーね絵画！　お鍋しようお鍋！」

『もごもごごごご』
「もう、何言ってるかわかんないよー」
変な絵画、……あ、私のマフラーのせいか。まあいいや。
「きっと今年もホワイトクリスマスだよねー。楽しみだなぁ。あ、絵画も雪触る？　触ったことないでしょ？　あのねー、雪ってつめたくてほわってしててー……」
私は絵画を壁から外して、窓のところまで連れていく。
「ほら、雪だよー」
『ぷはっ、知ってるに決まってるだろーが！　うわやめろ近付けるな痛むだろうがー！』
「痛む？　どっか痛いの？」
私が首を傾げると、絵画は心底疲れたように溜息を吐いた。
『おいとーこ、お前俺が絵画だってこと、忘れてるだろ……』
……絵画は何を言ってるんだろう。
「もう、変な絵画、絵画は絵画でしょ？　ほら、雪だよー！」
『うわもうやめ、なにもわかってないだろお前―！』
どこか怯えた様子で私の申し出を断固拒否する絵画。
――そんなに寒いの嫌いなのかなぁ……。
私は喚く絵画を横目に見ながら、もしここが雪国だったら『かまくらの中って意外とあったかいんだよ』っていうのが本当か、一緒に検証できるのになー、と、残念に思ったのでした。

みかん

「一人のためにたくさんの人を犠牲にするか、たくさんのために一人を犠牲にするか、どっちが正しいと思う？」
お風呂上り、こたつの中でアイスを齧る私がそう言うと、絵画はぎょっとしたように黙った。そして、
『……とーこ、何の本読んだんだ？』
と聞いてきた。
何その、こいつ大丈夫か？みたいな顔！　いいじゃん、たまには真面目なこと聞いたってー！　これが真面目なのかと聞かれるとわかんないけどさー。
「まーまーいいから、どっち？」
私が問いかけると絵画はちょっとの間考えて、
『別に、オレはオレ様が美しくあればどっちでもいいぞ！』
と、なんか偉そうに笑った。

――本当に、誰に似たんだろうこの子……。犬は飼い主に似るらしいけど……私、こんな感じかな？　お母さん似でもないし……やっぱり元々か。
『それで、何の話だったんだ？　とーこが本を読むなんて……そんな暇があればオレを観賞しろよ！』
「もう十分したよ、観賞は……」
確かに本は苦手だけどさ……だって眠くなるんだもん。あ、漫画は好きだよ？
「それに本じゃないの。ちょっと今日の授業で気になることがあって」
『――お前授業聞いてたのか？』
絵画は心底不思議そうにそんなことを言ってきた。
ば、バカにされてる……！　これが噂の、『飼い犬に手を噛まれ

る』ってこと！？――ほら見てよ、私だってそれくらいはわかるんだからね！

――昔習字の時間に、『好きな四字熟語を書きましょう』って言われた時、『七転八起』って書こうとして、間違って『七転八倒』って書いちゃったことを思い出したけれど……もちろん絵画には内緒だ。ちなみに『七転八倒』は、＜激しくのた打ち回ること＞だって。――ほ、ほらね、ちゃんと覚えてるよ、学習してるでしょ？……えへ！

「今日経済の勉強の時、ＴＰＰの話になってね」

私が慌てて話を戻すと、絵画は興味なさそうに視線を寄越して（たぶん）、

『なんだそれ』

とそっけなく聞いてきた。

「えーっと、たしか自由な貿易を推進する、みたいなやつ？」

『……アバウトだな』

絵画が疑いの目でこっちを見ている！　で、でもたしかそんな感じだった！はず！

私は気を取り直して、今日の授業内容を思い出す。

「そう、それで、たとえば外国からすっごく安いみかんが入ってきたら、日本のみかんはあんまり売れなくなっちゃうでしょ？　そしたら日本のみかん農家の人が困っちゃうの」

『じゃあ、そんなてーぴーぴ？は止めればいいだろう』

「うん、そうなんだけどね。でも、長い目で見ると、また違うらしいの」

絵画は意味わかりません、みたいに黙ってしまった。

「えーっと、先生が言うには、貿易って言うのは長い目で見ると、お互いの国に利益を必ずもたらすように出来てるんだって。だから、自由貿易で貿易が活発になると、将来的にはみんなハッピーになれるらしいの」

『ふーん、じゃあやればいいだろう』

「うん、でもそうすると、やっぱりみかん農家の人たちは困っちゃうでしょ？」
私はアイスを食べ終えて、こたつの上に乗っているみかんを一房口に入れる。アイス食べた後だからすっぱいけど、でもおいしい。日本の昔ながらの伝統だよね、こたつみかん。
『それで、最初の質問か？』
絵画が珍しく私の考えを読んで言った。――おお、なんか感動する！
「うん、そうなの！　いつかはみんなハッピーになれる方を取るか、みかん農家の人を守るか……どっちもって言うのがあればいいんだけど、私には思いつかないしなぁー」
偉い人たちが考えてもわからないことを、私がわかるはずもないし。私はこうやって大人しくみかんを食べることくらいしかできないよなー、なんて考えていると。
『そんなの簡単だろう』
「え？」
絵画が、思いもよらない言葉を口にした。
「え、絵画なんか思いついたの？」
今まで絵画のこと正直おバカさんだと思っていたけど、それはもしかして違ったの！？　おバカなのは私だけだったの！？　いやだー！
でもすごく気になる。人間とはまた違う視点みたいなもの、きっと持ってるんだろうし。
『ああ、みんな幸せになればいいんだろう？　簡単なことだ』
わくわくする私を前に、絵画は本当に何でもないように言って、
『――全員、オレを見れば解決じゃないか？　そんなことを考えているのがバカバカしくなるような美しさだろう、オレ様は！』
そしていつも通りふんぞり返った。
――本当に、どうしてこの子はいつも……こんなにおバカなんだ

ろう……。
「はあぁぁ、期待して損した。絵画はやっぱり絵画だね……」
『失礼だな、せっかく答えてやったというのに！　よし、まずはとーこ、お前からとりあえず観賞しろ！』
また絵画の病気が始まった。よし、これを今日から『オレを見ろ病』と名付けます。え？　そのまんま？……気にしない気にしない。
そうそう、気にしない。私はもぞもぞとこたつにもぐって、絵画を無視してテレビをつける。
「うーん、みかんはおいしいなあー」
『とーこおぉぉぉ！』
私は舌が慣れてきて、甘く感じられるようになったみかんを頬張りながら、世の中みんな絵画みたいにおバカだったら平和なのかなーと考えて……やっぱり1人で十分だなーなんて思ったのでした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0276y/

瞳子の日常

2011年12月20日16時45分発行